大館・花岡・伊勢堂岱
研修旅行報告書

２０２３年１１月

秋田大学大学院教育学研究科
教職実践専攻（教職大学院）

目　次

２０２３年度研修旅行日程、参加者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
大館市教育委員会ＨＰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
城西小学校ＨＰ・・3
城西小学校の授業の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
城西小学校の児童の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
城西小学校の学校の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
城西小学校：学校説明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
学校説明の質疑応答・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
大館市教育委員会：行政説明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
行政説明の質疑応答・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
夕食会の様子・・12
花岡フィールドワーク（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
花岡フィールドワーク（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
伊勢堂岱遺跡（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
伊勢堂岱遺跡（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
縄文館・・・17
研修旅行感想・・・18

※本研修旅行は『NITS（教職員支援機構）・教職大学院等コラボ研修プログラム支援事業』を活用して実施した、ふるさと教育実地研修「地域の教育長が語る『我が町の教育』2023」の成果の一部です。
　教職員支援機構及び大館市・北秋田市教育委員会、城西小学校の皆様、日中不再戦友好碑をまもる会の皆様にも、深くお礼を申し上げます。

２０２３年度研修旅行日程

１０月５日（木）

８：００　大学出発

１０：０５　城西小学校到着

１０：２０～１１：０５

授業参観

１１：１０～１１：４５

授業質疑応答

１２：００～１３：４５

昼食（中央公民館）

１３：００～１５：４０

大館市の教育　教育長他

学校経営説明　教頭他

１６：２０

グランドパークホテル大館

１０月６日（金）

８：３０　ホテル発

８：５０　鳥潟会館

９：００～１１：３０

花岡フィールドワーク

１２：２０

昼食（道の駅鷹巣）

１３：３０～１５：００

縄文館・伊勢堂岱遺跡見学・講話

１６：５０　秋田大学着

参　加　者

学校マネジメントコース

現職院生１年次

大内　秀朗

小田嶋　寿

片岡　淑人

川越　真紀子

神田　雄樹

齊藤　道太

佐々木　譲

林　栄美子

三浦　雄司

吉田　英亮

カリキュラム・授業開発コース

学卒院生１年次

安部　大成

安藤　のどか

加藤　毬乃

熊谷　魁

髙橋　想奈

土田　訓徳

長澤　未姫

畠山　陽輔

福原　航平

米屋　千陽

学卒院生２年次

須藤　よしの

武石　早穂

発達教育・特別支援教育コース

学卒院生１年次

東海林　天

学卒院生２年次

佐藤　茅奈美

山田　有輝也

付添教員

近江谷　正幸

秋元　卓也

鎌田　信

佐藤　修司

外池　智

大館市教育委員会ＨＰ

1. 大館市教育委員会教育大綱

大館市教育委員会の基本理念は「ふるさとに学び、未来を創造できる、「人財」の育成」である。また、基本目標は「信頼と安全を築く教育環境の整備充実」、「ふるさとを担う「未来大館市民」を育成する学校教育の深化」、「ふるさとの誇りと未来をはぐくむ生涯学習の推進と支援」、「郷土の歴史と文化を学び、大館びとの誇りを醸成する」、である。

2. 重点施策

基本目標の中に重点施策が掲載されている。「信頼と安全を築く教育環境の整備充実」のための重点施策は、安全・安心で快適な学校生活のための教育環境の整備充実を図ること、豊かな人間形成の場としての社会教育施設等の整備充実を図ること、大館の教育の理念と実践について、市民への周知と全国への発信に努めることである。これは教育総務課が担当している。

「ふるさとを担う「未来大館市民」を育成する学校教育の深化」のための重点施策は、ふるさとキャリア教育を通して、自立の気概と能力を備えた人財の育成に努めること、大館教育を起点として、社会、全国、世界との架け橋を構築すること、コミュニティ・スクールにより、地域学校協働活動の充実を図ること、児童・生徒を教育パートナーとして、「おおだて型授業（響学）」の質を更に高めること、学習指導要領に対応した教育環境や基盤の整備を推進することである。これは学校教育課教育研究所が担当している。

「ふるさとの誇りと未来をはぐくむ生涯学習の推進と支援」のための重点施策は、ふるさとキャリア教育の理念に基づく「知の循環型社会」の形成に努めること、市民版ふるさとキャリア教育を推進し、社会人の学び直しを支援すること、「未来大館市民」を育成するための社会的連携態勢を構築すること、高校生や大学生による「街づくり活動」等を支援すること、「ふるさと学習」の機会を積極的に提供し、地域を誇れる素地を醸成すること、「生涯読書」活動を推奨し、その推進と拡充に努めること、伝統・芸術・文化の継承と振興を支援することである。これは生涯学習課、中央公民館、地区公民館、市民交流センターが担当している。

最後に「郷土の歴史と文化を学び、大館びとの誇りを醸成する」のための施策は、大館の歴史と文化を学ぶ機会を提供し、市民の誇りと自信を醸成すること、郷土の伝統文化を継承・普及する活動を支援すること、文化財の保護と調査を進め、未来に伝えること、歴史的風致維持向上計画に基づき、風致を構成する有形無形の文化財の保全と活用に努めることである。これは、歴史文化課が担当している。

引用：教育要覧 2023（全体版）.pdf（odate.lg.jp）

【安部大成】

城西小学校ＨＰ

1．学校紹介

大館市立城西小学校は、昭和 33 年 9 月 30 日に開校され、創立 65 周年を迎える学校である。平成 19 年には、秋田県最初のコミュニティ・スクールの指定を受け、今年で 17 年目となっている。今年度から大館市内全ての小中学校がコミュニティ・スクールとなり、コミュニティ・スクールのパイオニア、「チーム城西」として様々な情報を発信し続けている。

2．学校教育目標

城西小学校の教育目標は、「チーム城西　ともに光かがやく」である。「チーム城西」は、子ども、保護者、職員だけでなく、地域の方々も含み、「自分だけ」「我が子だけ」ではなく、全員が「ともに光かがやく」ことを目指している。また「光かがやく」とは、「幸福に満たされた状態」を指している。自分一人だけが幸せになっても、本当の幸いはそこにはなく、みんなと幸せを共有し、分かち合うことで、さらに大きな幸せを得られることを子どもたちは日々の学習や学校生活、そして地域とのふれ合い活動を通して学んでいる。幸いを共有する社会（ウェルビーイング）の実現のために、城西小学校区のウェルビーイングの実現を目指している。

大館市城西小学校ＨＰよりダウンロード

3．スクール・コミュニティづくり

城西小学校では、スクール・コミュニティづくりを目標にしている。子どもたちの発想や願いを生かした地域づくり・地域貢献のため、「秋田県最初のコミュニティ・スクール」のよさを生かして、学校も地域も成長し続ける「城西 100 年教育」を行っている。

4．もあハッピー大作戦

スクール・コミュニティづくりを目指すなかで、みんなの幸せを願い、行動する児童（未来大館市民）の育成と、城西小学校区のウェルビーイングの実現のため、令和 3 年度から、「もあハッピー大作戦」を行っている。令和 3 年度は、第 1 章「もっとみんなが幸せになるために」、令和 4 年度は、第 2 章「みんなと幸せを分かち合うために」、そして、令和 5 年度は、最終章「みんなの幸せがずっと続くために」というテーマで行われている。

「もあハッピー大作戦」の「も」は「目的意識」、「あ」は「相手意識」である。昨年度は誰もが幸せになれる魔法の言葉「ありがとう」をキーワードに進められてきた。今年度は「Happy」をキーワードに、「城西 Yes！」と、まずは行動に移し、試行錯誤から得られた感動・納得・感謝のリターンによって、本当の幸いは一人一人の心の内にあることに気付かせるとともに、みんなの幸せがずっと続くこと、「弥栄」（いやさか）が目指されている。

5．「城西 100 年教育」

城西小学校では、コミュニティ・スクールとして、「城西 100 年教育」が行われているとともに、地域・保護者と連携した学校運営を行っている。学校運営協議会の中には、学校と一緒になっ

て子どもたちのことを考え、諸活動を企画・運営する「地域委員会」がある。エコ・夢プロ・ライフ・グリーンの4部門があり、地域人材や学習材の活用、呼びかけ、自主的な事業の企画と運営を行っている。活動は評価され、平成30年度には文部科学大臣表彰、秋田県環境大賞を受賞している。

具体的な活動として、「交通安全教室見守り」、「5年生米作り指導」、「外部講師によるクラブ活動」、「給食交流会」などがある。優しさや思いやりの心と地域との関わりやふれ合いを通して育み、子どもたちの発想や願いを未来につなげてほしいという願いが込められている。

6，ふるさとキャリア教育

城西小学校では、大館市小・中学校教育の指針である『ふるさとを担う「未来大館市民」を育成する学校教育の深化』を目指し、学校教育目標を「チーム城西　ともに光かがやく」を定めコミュニティ・スクールのつながりを生かしたふるさとキャリア教育の推進をしている。そして、城西小学校では「弥栄プロジェクト～みんなでつくろうぼくらのふるさと～」を実施し、教育課程における様々な活動や、生活科・総合的な学習の時間での様々な学習を行っている。

プロジェクトの具体的な活動は、スクール・コミュニティ活動では、「修学旅行での大館PR活動」や、「保健委員会こども園訪問」、「町内ごとのSC活動」が行われている。また、生活科では地域の人や自然にふれあう活動が行われ、総合的な学習では、秋田杉や福祉、米づくりをテーマとした活動が行われている。さらに、6年生は集大成としての弥栄プロジェクトを行い、大館囃子と踊りの発表などをしている。「大館盆地全体を学舎に、市民一人一人を先生に」を掲げ、コミュニティ・スクールのつながりを生かして、子どもたちが地域のためにできることを考えて行う活動が盛んに行われている。

大館市城西小学校HPよりダウンロード

＜参考HP＞
大館市立城西小学校（jousei.sakura.ne.jp）

【安藤のどか】

大館市章

城西小学校章

城西小学校の授業の様子

城西小学校におけるフリー参観では、専門教科や授業内容の興味・関心等に応じて、院生それぞれが自由に各学年・学級の授業を観察した。授業参観を通して第一に感じた点として、児童の取り組みが非常に活発であるということが挙げられる。学習問題や授業者の問いを受けて積極的に挙手や発言を行う児童の姿が、各学級においてみられた。

写真１・２　元気に挙手をする児童

２年１組の算数の授業では、「にているところはどこだろうか。」という学習課題の下、長方形や正方形（授業中は長四角や真四角といった言葉を用いていた）をはじめとする平面図形について学習していた。授業では、児童自身が黒板に示された言葉を用いて図形の特徴を説明する様子がみられた。例えば、直角のある台形が長方形といえない理由について、児童は「長方形には４つの直角がある」という特徴に着目しながら理由を述べていた。

写真３　図形の学習に取り組む児童

ふたば組では、「おきゃくさんをさそっていっしょにあそぼう。」というめあての下、ジェンガや的当てといった様々なゲームを楽しんでいた。児童はただゲームをするだけでなく、参観中の院生に対して「一緒に遊びませんか」「入っていいですよ」と誘っていたほか、最後は「また遊んでね」と呼びかけながら見送っていた。

ゲームで遊ぶ活動を通して、児童は周囲に言葉掛けをしたり、順番を守ることといったルールを意識したりする。これらによって、日常生活や社会生活において求められるコミュニケーション能力（例えば、場面に応じた言葉掛けやマナーを守ることなど）が自然と養われるのではないかと感じた。

写真４　ゲームを楽しむ児童

【加藤毬乃】

城西小学校の児童の様子

城西小学校に入った瞬間から「こんにちは！」と院生に向かって元気で明るい挨拶をする児童の姿がとても印象的だった。自分も相手も互いに気持ちよく過ごすためには、元気で明るい挨拶が重要だと改めて実感した。

３時間目はフリー授業参観が行われた。２年１組では算数科「さんかくやしかくの形をしらべよう」の授業が行われていた。授業学習の見通しを立てる際に、机に集まる児童、前時までの学習内容が掲示されている“学びコーナー”に集まる児童、黒板に貼られている図形（カード）を手に取る児童など、多様な学びの姿が見られた。また、クラスメイト同士で話し合いながら活動している様子も印象的だった。

授業中盤での全体思考では、積極的に手を挙げて発言する児童の姿が見られた。発表をしていない児童も、しっかりと発表者の方向を見ながら話しを聞くことができていた。一人の発表が終わった後も「同じです！」「付け足しです！」などとハンドサイン（全校共通のもの）を使って、友達の発表をもとに自分の考えを伝えようとする一人一人の児童の意欲を感じることができた。このような光景は他の学級の授業でも見られた。「ともに　光りかがやく」という学校教育目標の通り、一人一人が光り、互いのよさを発揮し合えるような授業が展開されていた。

発表している途中で言いたいことが分からなくなってしまい、困っている児童がいた場面では「助けます！」と挙手をする児童の姿もみられた。発表者の話をしっかりと聞き反応するだけでなく、発表者を助けてあげようとする態度も養われており、大館市が目指している共感的・協働的な学び合いが展開されていた。

このように児童一人一人が互いに活躍し、全員が光り輝くことのできる授業を行い、地域社会で主体的・協働的に生き抜いていくことのできる子どもを育成いく必要があると改めて感じた。

【髙橋想奈】

城西小学校の学校の様子

１　子どもたちの様子

城西小学校の児童は、私たちがバスから降りるところから窓越しに手を振ってくれたり、挨拶をしたりと非常に活発な第一印象をもった。校舎に入ってからも、すれ違う児童一人一人が私たちの顔を見ながら笑顔で挨拶をしてくれ、素直で健やかに成長している様子をあいさつの様子から垣間見ることができた。

授業中では、「本気ッズタイム」の合図のもと児童が主体的に協働学習を行なっていた。このような活動に抵抗なく取り組めるのは、自分の意見を話したり、相手を尊重するということが日頃から意識されているからである。そのため、教師の具体的な指示がなくても一人一人が発言し協働できるのであろう。城西小学校の児童は、授業中でも屈託のない笑顔で授業を受けていた。

２　校舎の様子

城西小学校は、平成１５年度に城西児童センターとの学舎融合施設として現校舎が完成し、ハート色の校舎として親しまれている。学年やクラスは扉で仕切られておらず、開放的な廊下が広がっていた。そのオープンスペースである廊下には、児童の制作物が所狭しと掲示されていた。一方で、教室内の掲示物は比較的に少ない印象をもった。大きな掲示物などは児童の集中力を散漫にさせてしまう可能性があるためではないかと考える。教室をスリム化しつつ、オープンスペースで児童の成果を共有することで、有効に場所を使えている印象をもった。

また、特徴的な校舎は、児童館の交流を促進したり、クラス内に閉塞感をもたせないため、児童がのびのびと学ぶことができる場になっていた。

３　学習環境と教職員の様子

様々な配置で授業を行うことで、児童の協働学習が活性化されていた。全体学習の際は、黒板に向かって翼のように広がるウイング型で行い、全体で協議する際などはコの字型で学習を行うことで、黒板に注視できたり、相手の顔を見ながら話し合いを行うことができる。それらの利点を踏まえて、授業の効率を最大限生かすことができるよう、活動よって机の配置を変更することを意識的に行なっていた。

印象に残った授業は、2 年 1 組の算数である。児童に「これは難しいから先生が説明してもいい？」という問いかけから児童の「自分でやりたい」の声を引き出していた。児童が自ら考えたいと思えるのは、日頃から自分たちの力で考え、検証するといった活動を行なっているからこそである。児童の「自分で考えたい」と思わせる授業はどのような授業なのか、考えさせられる 1 シーンであった。

【熊谷　魁】

城西小学校：学校経営説明

大館市立中央公民館にて、「共感的・協働的な学び合いの質を高める授業改善」と題し、秋田大学教職大学院コラボ研修が実施された。

本研修では、はじめに大館市立城西小学校研究主任の庄司静香先生による算数の授業動画を視聴した。続いて、大越章弘教頭先生から城西小学校の研究についての説明があった。

庄司先生の算数科の授業動画では、共感的・協働的な学び合いの質を高めるための工夫がいくつか紹介された。

まず、見通しを立てる場面において子どもたちは話し合いが行われる。挙手制ではなく、自由に子どもたちが話しているのが印象的だった。この話し合いを通して、どの子がどのような考えを持っているかを教師が確認し、意図的指名を行うことで授業の軸をぶらさずに進めることができる。

次に、児童主体の対話による学び合いである、「本気ッズタイム」が行われる。この本気ッズタイムになったら自分たちの力で学び合っていこうと子どもたち自身が自覚しており、1年生から6年生まで全校で実施されている。また、発表の場では、説明する人だけでなく、指示棒で指す人など全員が発表の場に関われるような工夫もされていた。さらに、子どもたちが「助けます」と言ってくれることによって、教室では間違えてもいいと思える雰囲気がつくられていた。「本気ッズタイムⅡ」では深い学びに繋がるような発問や問い直しが行われる。性質や本質を問う問題を出すことによって子どもたちも考えたくなっていると思う。それらを対話によって解決しようとすることによって、より深い学びに繋がっているのだろう。

続いて大越先生の説明の中で、共感的・協働的な学び合いを支える土台作りについての話があった。日常の学び合いがよりよいものになるように、学習規律や発表の仕方についても指導が行われている。さらに、ＩＣＴの効果的な活用なども考えられている。日々の指導の積み重ねが、学び合いの質を高めていることがわかった。

協議の場面で加藤さんが「学び合いが一部の子どもたちだけで成立してるのではないか、全員の学びに繋がっているか？」と質問をしていた。それに対して大越先生は、子どもたちがどのようなことを考えているのかを見取ること、また、どの児童がどの場面で活躍できるかを知っておくことが大切だと述べていた。

最後に大館市の研修会で教師が主体的・対話的で深い学びをできないといけないと述べていたのが印象的だった。子どもたちに求める前にまず自分たちがそれをできるようにすることが大切だと改めて感じることができた。

【福原航平】

学校説明の質疑応答

若手教員の取り組みに関してはベテラン教員の押し付けにならないようにする方針があるとのことだった。褒める部分は褒めていき、褒められない部分について自分で気づくことで少しずつ修正していくイメージで指導しているという。

校種間の連携について、高校生が小学生と交流したり、授業をしたりする機会などで連携を図っているとのことであった。そこで授業をした高校生が将来教員として小学校に戻ってくるといった素敵なエピソードもあった。

地域との連携という点では定期的に町内会長と話し合いの機会を設けることで地域に何が求められているのか、また学校側の方針はどんなものかを相互で共有できるという点でメリットだと考えられる。

授業に関しては、言語化が難しい子どもに対しては使ってほしいキーワードを予め提示しておくことで、書くための指針になる。書くことだけでなく、話すことが困難な子どもに対しての指導も手厚く行われていて、TT で対応したり、部分的に発表する時間を設けたり、指示棒を動かす係を行ってもらったりすることで対応するとのことだった。

授業内での子どもへの指導に関して、子どもに役割を理解させることで、どの場面で発言をするべきかを子ども自身に自覚してもらう。例えば「まとめ名人」ということを子どもに自覚してもらうとその場面では積極的に発言していくことができる。

質疑応答を通して、子どもへの対応や教職員間においても自己肯定感が高まるような場面が多いと感じた。学校のキーワードとして「Happy」が掲げられており、短いフレーズで誰もが意識しやすい。それによって、学校全体で意識が浸透しているのだと感じた。その取り組みが学校だけでなく、地域にも広げるための交流会を定期的に開いていることが地域に根差した経営だといえる。

【土田訓徳】

大館市教育委員会：行政説明

「ふるさとキャリア教育の 13 年～教育のイーハトーヴを求めて～」と題し、大館市教育委員会教育長　高橋善之先生から、ふるさとキャリア教育の起点や実際の取り組み、高橋先生が大切にしていることなどについてお話をたくさんいただきました。

〇起点　「消滅可能性都市」からの脱却

人口減少や少子高齢化が進み、消滅可能性都市と言われるようになった大館市に住む大人達は、「大館には何もない」と自嘲していました。大人が子どもや若者達に希望を語れないような街では、消滅を止めることはできません。そこで、人口減少を抑制しつつ「少数精鋭の街　大館」の構築のため、自立の気概と共感的協働力を備えた「未来大館市民の育成」に焦点を絞りました。

大館市の魅力に気付くためにはふるさと教育、自らの人生の指針を描くためにはキャリア教育が必要ですが、これらの教育をそれぞれ行っても、

若者の県外流出は抑制されません。そこで大館市では、ふるさと教育とキャリア教育を融合することで、子ども達が「ふるさと大館」の基盤上に人生の指針をおくことを目指し、「大館ふるさとキャリア教育」を教育理念として掲げました。

〇実際の取り組み

・百花繚乱作戦

修学旅行先でのふるさとＰＲ、ふるさとＣＭづくり、ＦＭラジオに出演、学区内のエゾタンポポを守る等

・子どもハローワーク

大館市内の児童生徒を対象とし、土日祝日や長期休業中に「働く体験」を仲介。数多くの企業、施設が協力しており、子ども達の希望に合った体験を行うことができます。

・おおだて型授業

共感的・協働的学び合い(響学)を核とする探究型授業が行われています。特に、「本気ッズタイム」が特徴的だと感じました。

大館市の取り組みについてたくさんお話をしていただきました。その中でも、高橋先生が大切にされている「諦めない限り有効」という言葉が心に響きました。これから先、どんなに困難なことがあっても、諦めずに子ども達のために頑張りたいと思いました。

【長澤未姫】

行政説明の質疑応答

まず、大館市城西小学校大越教頭から、授業改善に関する説明を受けた後、質疑応答を行った。集団での学びを学校で行うことや、様々な児童の個性を受け止めて、活躍場面を作ることの必要性についての話があった。

共感的・協働的な学び合いに関して、「学び合いが成立しているように見えて、一部受け身の児童生徒がいた場合どうするか」等の質問が出た。大越教頭からは、指名の順番を工夫するとの話があった。「児童が自由に話を出来る時間を作り、その時に教師がどのような順番で指名していくか順番の組み立てをして進める」とのことであった。

また、大館市教育委員会の長岐教育監からは、教員の意識に関する話があった。まず、「主体的・対話的で深い学びをするには、まず教員もそうでなければいけない。沈黙は損である。発言に根拠がない人がまず口火を切り、次に根拠がある人、最後に大正解を持っている人が良いことを言う」という流れで行っていたとのことだった。

授業でも、児童が話しやすい環境を作ることができるように、教員が授業をマネジメントすることの重要性を学んだ。

大館市高橋教育長との質疑では、「大館市で教員として働くにあたって、どのような力を身に付けておくべきか」という質問が出た。教育長からは、「絶対に一人たりとも見捨てず、置き去りにしない」意識が大切であるとの回答があった。その際に、大館市内の児童が描いた絵や、その絵をもとにして作成したトートバッグの紹介があり、教育長が、大館の子供たち全員を大切にしていることが伝わってきた。

また、大館市出身の院生から「大館市で育ち、ふるさとキャリア教育として行っている取り組みを自分自身も体験してきたことを覚えている」との話が出た。大館市でのふるさとキャリア教育が未来大館市民の育成に大きく影響していると全員が実感した。

【米屋千陽】

夕食会の様子

城西小学校、大館市立中央公民館での研修を終え、宿泊する「グランドパークホテル大館」で一息ついたのち、会食会場となる「酉や喜兵衛大館店」へと向かいました。ストマスの土田さんによる軽快な乾杯の音頭とともに夕食会は幕を開けました。盛り上げ上手な土田さんの挨拶により、会食を楽しみ交流を深めようという気持ちが、皆さんの中で一層深まったように思います。

【土田さんの乾杯の挨拶の様子】

夕食では、素材の味を生かした様々な料理を楽しむことができました。備長炭の強火で焼き上げたという焼き鳥や、名物である豆乳とり鍋をつつきながら、北鹿・大吟醸「北秋田」や福小町・特別純米「亀の尾」などの地酒や各々好きなお酒を味わい、院生の皆さん、先生方との親交を深めました。

宴会の中では、鎌田先生や佐藤修司先生からのご挨拶もいただきました。鎌田先生からは、１日目の振り返りとして「大館の教育を皆さんに見てほしかった。」というお話をいただきました。会食の中でも、城西小学校での授業参観や大館市教育長のご講話を振り返り、学びとなったことや驚いたことなどを共有し合いました。

【佐藤修司先生のご挨拶の様子】

私は会食が終わってからは、ストレートマスターでの二次会にも参加し、より仲を深める時間とすることができました。こうした楽しい時間を通して、様々な人との出会いは自分を成長させてくれる、と改めて実感することができました。

【二次会での様子】

【畠山陽輔】

花岡フィールドワーク（１）

花岡事件に関する五つの場所を巡った。説明において、当時の状況を具体的にお話しいただいたことで、この地でどのような残忍な行いがされていたのか、頭に情景を浮かべながら学ぶことができた。

【写真１】

写真１は、花岡事件における石碑である。石碑には、関連する出来事によって亡くなられた方々の名前が刻まれている。その数は数百にも渡り、存在する石碑も一つではない。

【写真２】

説明においては、当時に撮影された写真を提示しながらお話しいただいた。写真２は、事件により亡くなられた方の白骨化したご遺体を見つけ出した時に記念で撮影されたものであるという。こちらの写真からも、事件に関わっていた方々の扱いがどれほど酷いものであったかが分かる。

【写真３】

写真３は拷問を受けている際の被害者が描かれた資料について説明を受けている様子である。版画によって表現されたものであったが、被害者がどれほど苦しい思いを強いられながら生かされていたのかを、強く感じさせられた。

【写真４】

今回のフィールドワークは、大人の自分であっても心に重く残るものであった。そのため、子どもに対してこのような出来事を教材として扱う際には、心のケアの部分で特に配慮が必要であると思われる。

どのような教材であっても、提示することで子どもがどのような反応を示すのか、できるだけ具体的に想定した上で授業で使用することが求められることを、今回の体験を通して改めて学ぶことができた。この学びを、今後の教師人生に活かしていきたい。

【東海林天】

花岡フィールドワーク（２）

秋田県の大きな戦争被害として、昭和 20 年の土崎空襲が挙げられる。この空襲は最後の米軍からの攻撃だったとされている。日本国憲法第 9 条にある「平和主義」は、悲惨な戦時中を顧みる度に思い返される。

「花岡事件」は、戦時中中国人や朝鮮人を大館市の山地へ強制連行し、過酷な環境で土木作業に従事させた出来事である。虐殺された犠牲者は 400 人以上にのぼる。強制連行された人々が収容された施設は「中山寮」と呼ばれていた。衣食住に関しては内務省の指導が入り、「最低限」のものしか与えられなかったという。1 日 10 時間以上の労働は年中行われ、衛生面は管理されていなかった。

【中山寮跡の近く】
一見普通の山中の景色。
この場所を歩いた人々を悼む。

このような労働環境に耐えかねた人々は 1945 年 6 月に一斉蜂起する。しかし、憲兵団や警察も含めた日本人によって捉えられてしまう。「共楽館」前の広場に集められた後、さらなる虐待が加えられ、亡くなった方は 100 人以上に上った。

【共楽館跡の近く】
人権を無視した非情な虐待が
ここで行われていた。

中山寮、共楽館ともに現在形は残っていない。戦後の日本はこれらの記録を消去しようとしたのである。今回、事件の詳細を知ることができたのは、当時の人々が長い時間をかけて調査を重ねて真相を世に出し、「日中不再戦友好碑を守る会」の皆様、地元の方々が不断の努力をされてきたからである。日本における加害の歴史が語られることは少ないが、改めて今平和を考えるために必要な経験であった。

【武石早穂】

伊勢堂岱遺跡（１）

伊勢谷遺跡は大館能代空港アクセス道路東西線建設に先立つ発掘調査で平成 4 年に発見されました。平成 7 年から秋田県埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、平成 8 年に縄文土器や石器とともに多くの石組みが見つかったことから、環状列石を中心とした遺跡であることがわかったそうです。

秋田県埋蔵文化財センターの発掘調査で 3 つの環状列石が確認されました。このことから地域住民や県民から遺跡の保存の声が高まり、平成 8 年 11 月に佐々木喜久治秋田県知事（当時）が道路計画中止を決断し、遺跡を現地保存することが決定されました。

伊勢堂岱遺跡は縄文時代後期（今から 4000 年前）の祭祀遺跡です。環状列店をはじめ、配石造格・立柱建物跡・溝状遺構・道路状遺構、落とし穴が検出されています。遺跡は約 200 年間利用されました。本遺跡は広大な台地で掘削・盛土や、溝状遺構といった地形改変を行い、4 つの環状列石を造っていることから、縄文時代の集団祭祀を明らかにするための重要な遺跡と考えられています。縄文人が川から石を運び、大きな円を作りました。石の下には土坑墓があります。さらに、石の周りからは祭祀の道具が出土することから、環状列石では墓に葬られた祖先をと弔うために、歌や踊りなどのマツリの場として使われたと考えられています。

伊勢堂岱遺跡では、環状列石（ストーンサークル）が 4 つ発見されています。4 つも発見されているのは、国内でも他に例がありません。発見された順番に環状列石Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄと命名されています。

伊勢量代遺跡の環状列岩は 1,300 個の河原石でつくられています。これらの石を縄

文人はどこから運んできたのか疑問に思いましたが、調査研究の結果、5km 以内の河川等から運んできたと考えられます。環状列石 A より北側で複数の道路状遺構が発見されています。縄文時代の地層で土が固くしまっていました。縄文人はソリのようなもので石を運んだのかもしれません。

【須藤よしの】

伊勢堂岱遺跡（２）

伊勢堂岱遺跡は北秋田市脇神字伊勢堂岱に位置する、縄文時代後期前葉（約 4,000 年前）の環状列石を主体とする遺跡です大舘国際空港アクセス道路東西線建設に先立つ発掘調査で平成 4 年に発見されました。4 つの環状列石を中心に、配石遺構、掘立柱建物跡、土坑墓、柱穴、溝状遺構などが検出されています。

4 つの環状列石の 1 つ、環状列石 A は 1300 個の川原石で作られており縄文人は５ｋｍ圏内の河原から運んできたといわれています。環状列石の石を 1 つずつ調べてみると、20 種類の石が使われていることが分かったそうです。青や白、黄色などカラフルな環状列石を作ろうとしていたことからも、ここで暮らしていた縄文人はオシャレさんだったのかもしれません。伊勢堂岱遺跡の面積はおよそ 20 万キロといわれています。しかし、環状列石は台地の縁辺部に集中しています。

伊勢堂岱遺跡では、48 体の土偶が発見されています。その中のひとつ伊勢堂岱遺跡出土板状土偶は唯一完全な状態で発見された土偶です。この何とも言えないかわいらしい見た目がいいですね。

遺跡の範囲や 4 つの環状列石などから縄文人の世界観や社会構造を復元される貴重な歴史として、平成 13 年に国の史跡に指定されました。さらに、北海道・北東北の縄文遺跡群の一つとして 2021 年 7 月 27 日に世界文化遺産に登録されました。4000 年の時を経て、世界でも認められる遺産、当時ここで暮らしていた人々はそのようなことを想像できたのでしょうか。
この貴重な文化遺産を取り入れた学習活動を行ってみたいものです。

参考
史跡　伊勢堂岱遺跡
https://www.city.kitaakita.akita.jp/isedotai/past/　（令和 5 年 10 月 30 日閲覧）

【山田有輝也】

縄文館

縄文館は、2016 年 4 月 23 日にオープンしました。そして、遺跡と縄文文化を紹介するための情報発信の場、学習の拠点として使われています。加えて、床下チャンバーシステムを導入し、電力を効率よく使用しているようです。そのような努力があり、24 時間一定の温度や湿度を保つことで展示品の保護や館内の快適な教育活動が可能となっています。

元ＮＨＫアナウンサーの加賀美幸子さんの温かみのあるナレーションで、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成遺産となっている伊勢堂岱遺跡や縄文時代について動画を視聴することが出来ます。社会科の先生方は是非足を運んでください。また、環状列石Ｂの土坑墓から発見された板状土偶を高さ 2 メートルにした巨大板状土偶レプリカ（右側の写真）や北秋田市内で発見された土偶などが展示されているため、拝見することができるようになっています。加えて、土偶は板状土偶を中心に、時代順で時計回りに展示がされており、目の前で縄文人が作った土偶たちも見学することが可能となっています。

現在は、縄文館の人気投票（右側の写真）も行われています。実際に縄文館に足を運び、自分のお気に入りの土偶をみつけてみてはいかがでしょうか。

縄文館の裏側の外観

Q.「目はどこについているでしょうか。」

A. 答えは、縄文館へ

土偶総選挙にエントリーした土偶

【佐藤茅奈美】

研修旅行感想

【学部卒院生】

〇大館の教育は度々話題に上がるが、今回実際に授業を参観できただけでなく、教育長や校長、教頭の話を聞くことでその具体を知ることができた。それを踏まえて自分の授業実践や教育観に影響を与えることが多くあり、非常に有意義な時間となった。巡見では凄惨な事件を知った。このような事件を教材化することは子供達にとっても歴史や人権、ふるさとを考える非常に良い実践になると考える。

〇学校教育において，家庭・地域と連携した教育や子どものキャリア形成を促進する教育が重要視されていることは把握していたが，それらを実現するための方策等についてはよく分からないままだった。しかし，1 日目における学校訪問及び講話を通して，両者に関する実際の取り組みについて知り，理解を深められたことで，以前よりも具体的なイメージをもちやすくなった。

今後は，学校訪問及び講話で見聞きした内容を改めて整理することで，私が目指している中学校にも生かせる点はないか検討したいと考えている。

〇今回の研修旅行では、一泊二日という短い期間ではあったが自分にとってかなり有意義なものになった。自分の地元の秋田市以外の教育について触れる機会がなかなかなかったため、良いきっかけになった。今回インスピレーションを受けたことを具体的に言語化していき、これからの大学院生活に活かしていけるようにしたい。

〇2 日間のフィールドワークを通して、秋田市以外の教育の特徴や、秋田の歴史について勉強することができた。特に、秋田の歴史を学べたのは貴重な経験であった。秋田出身の身でありながら知らないことが沢山あり、まだまだ勉強が必要だと感じました。秋田型、大館型の教育についての理解を今後更に深めたい。

〇研修旅行を通して、大館市の魅力を教育的な視点から捉え直すことができた。大館市には、笑顔やハッピーなオーラが相手にも伝わるような方々がたくさんいらしたため、今後現場に出た際にぜひ教員として住んでみたいと感じた。こういった経験や参観等による学びを、これからの教師人生に生かしていきたいと思う。

〇一日目は城西小学校、大館市教育委員会の取り組み、２日目は花岡フィールドワーク、伊勢堂岱遺跡の散策を通して地域とのつながりある教育について考えさせられた。文化遺産もあり、コミュニティスクールとしても先進的な取り組みを行っている。地域と一体となって子どもを育む教育委員会の姿勢、恵まれた教育資源について学ぶことができた。今後、このような取り組みを自分の勤務地域ではどのように広げていくことができるのか、考えていきたい。

〇今回の研修旅行を通じて、秋田市以外の小学校の授業などを見ることが出来、子どもに寄り添った教育を行った所もあるということに安心した。就学前の施設との連携がきちんと行うことの大切さ、そして上に立つ人がどのような人なのかで、良い意味でも悪い意味でも、非常に影響していくなと改めて感じることが出来た。そのため、自分がいざ上に立つ人間となれた場合に対応することが出来るように精進していきたいと改めて感じた。また、繋がりがあるから、受け継がれてきていることなど様々あると感じた。昔から現在にかけて、体を張りながらでも作り上げてくれた物があることを忘れず、感謝して生きていこうと感じた。この二日間、貴重な体験、意見を聞くことが出来、良かった。

〇二日間の研修を通して、今後自分が勤務する公立小学校の学校運営や授業実践の様子を知ることができたことが非常に貴重な経験であったと感じている。学部での学び、附属小でのインターンシップを経て、改めて地元大館の教育に立ち返るこ

とができた。他の地域に誇ることができるふるさとキャリア教育の実践についてより詳しく知り、実体験と結びつけて振り返る機会となった。将来、自分が実践する立場になるという視点で見て、「私ならどう実践するか」を考えることが今後必要になると感じた。

〇大館市・北秋田市を巡り、豊かな自然環境と、教育資源の中で育つ子どもたちの姿を見ることができた。大館市の教育の根幹にある「未来の大館市民の育成」からは、ふるさと教育やふるさとそのものの意識を変革するような熱意を感じた。秋田県の抱える少子高齢化、人口減少、それに伴う様々な課題に立ち向かうために、教育ができることは何だろう･･･と、全国に先駆けて多くの取り組みが為されていることを知った。これから教員になる身として、何よりも自分自身の学びになった。今回の研修旅行は温故知新の姿勢を改めて意識させてくれた。

〇県北をこんなにじっくり見てまわったことが初めてだったため、非常に貴重な体験になった。大人でも十分楽しむことができ、学びの多い研修であった。今回学んだ事を子ども達が体験できるように教材化を行っていきたい。ただ体験するだけでなく、ただ見学するだけでなく、子どもたちに何を学ばせたいのか、何を感じて欲しいのか、明確にしなければならないと思った。

〇今回の研修旅行を通して、教育を原点として教職大学院の絆が非常に深まったものであったと感じた。特に大館市立城西小学校の訪問では新たな刺激がたくさんあり、これからの学びに繋がったと思う。大館市教育長の熱い講義は全員が心を動かされたと思う。人は教育でしか変えることができない。この言葉はその後の宿舎などでも口ずさむ人が多かった印象である。２日目は社会科見学の活動を通して、新たな学び、知識を得ることができ、ストマスだけでなく、現職教員も新たに学ぶことがあり、お互いの話題にもなった。有意義な研修であったと思う。

〇今回の１泊２日の大館研修旅行では多くのことを学ぶことができた。その中でも大きく２つある。1つ目は大館のふるさとキャリア教育についてだ。これから秋田県はどんどん若者が減っていく。そうしたときにどれだけ子どもたちに秋田県の良さを知ってもらい、誇りを持ってもらえるかが重要になってくる。また、これからは自分の未来を見つめ、社会と照らし合わせながら、成長していかなければならない時代になったと思う。そのために地元企業と連携したキャリア教育に力を入れている大館市のやり方は大変勉強になった。2 つ目は実際に行って学ぶことの大切さだ。小、中学生の時などにフィールドワークなどの体験を行ったが今でも覚えていることが多い。さらにそれらを学びと結びつけたりすることは大切なことだと思う。今回行った、花岡フィールドワークや伊勢堂岱遺跡は、行って話を聞くとより心に残ると思う。そういった体験や学びを子どもたちにもぜひ味わってもらいたいと思う。また、今回は県北だったが、今後は自分でも様々な場所に行って自分自身の学びを深めていきたいと思えた。

〇研修旅行を通して、「おおだて型教育」や「ふるさとキャリア教育」、「花岡事件」や「伊勢堂岱遺跡と縄文文化」など、様々なことについて学ぶことができた。特に、教員として働くにあたって、その地域について知ることが大切だということを強く感じた。私は栃木県で教職に就くが、地域ごとに特色があることは、秋田県も栃木県も同じである。地域の教育的資源を知り、教師自身が地域の魅力について知り、子どもたちに伝えることが重要な役割であると考える。今回の経験を今後の指導等に生かしていきたいと考える。

〇この研修では、地域に根ざした教育の意義や展開について学ぶことができた。１日目では、コミュニティ・スクールの運営の実際や、市全体で行っているふるさとキャリア教育の取り組みについて知ることができた。大館だからこそ、城西小学校だからこそできる魅力的な教育が展開されてい

た。２日目では、地域の教育資源の活用について学ぶことができた。総合的な学習の時間や社会科等で、伊勢堂岱遺跡や花岡事件の何を扱い、どのように子どもが学習できるようにすべきかを引き続き考えていきたい。

〇研修旅行への参加も、大館市に行くことも初めてだった。大学やインターンシップとはまた違う環境で学ぶことにより、私自身の学びに対するモチベーションも向上した。まだ後期のインターンシップが残っているため、今回の参観で学んだことを活かして授業を進めていきたい。

　また、花岡フィールドワークや縄文館で実際に見ること、その場に行くことによって、理解が促進されたり、共感や想像に繋がったりした。そのため、小学生にとっても、体験的に学ぶ機会が重要であると感じた。

鳥潟会館

【現職教員院生】

○由利本荘市在住の私にとって、大館市・北秋田市は、コロナ禍以前より同じ秋田県でも年に１回行くか行かない程度のなじみの薄い地域であった。今回回ったルートの中では、伊勢堂岱遺跡に一度行ったことがあったきりで、他の史跡はもちろん、教育機関にお邪魔させていただいたことは全くなかった。以前より大館市は「消滅都市」回避のために、百花繚乱作戦やおおだて型学習に取り組んでいることは知っていたが、それを実感できてありがたい経験となった。

○大館市教育長をはじめ、大館市の皆さんの郷土への誇りと教育への思いを感じ取ることができた二日間だった。特に大館市教育長の東日本大震災を経て自分は何ができるか考えてという話や、人口減が進む大館市で何ができるか考えたという話に、温かいお人柄と強いリーダーシップを感じた。リーダーの強い信念が周囲を巻き込み、大館市全体の教育活動を活性化しているのだろうと思う。幅広い知見と熱い情熱が組織を動かすのだということを感じた。

○歴史と現在、未来がつながる２日間であった。初日の学校見学では、「本来の学校」に触れることができた。訪問校はビジョンを持ち、試行錯誤しながらも、自らがやるべきことをぶれずに実行していた。市教委も同じである。チャレンジ精神と情熱、愛情にあふれていた。その道の確かさは子どもたちの姿が表していた。気分のいい１日だった。

　また、そのチーム力にも感服した。市全体がどんな子を育てるか、学校は何を優先すべきか、その足並みがそろっている。もちろん学校独自の、もっと言えば教師の裁量もあるだろうが、ともに高め合うには方向性と共通認識、日々の弛まぬ修養が必要だろう。そのバランスが図られており、働きやすい環境にも寄与していると思った。恐れずに進む、大館市の勢いと教育熱をひしひしと感じた。今後の学校のあるべき姿について考えさせ

られた。横手でもこの経験を生かして力強い歩みに貢献したい。

２日目は歴史的見聞を広めることができた。縄文から江戸、明治、昭和とその変遷に触れた。これまで知らなかったものもあったが、知識を得ることで様々なものの認識を新たにし、自らを振り返ることもできた。当事者は我々が知らないところで様々な苦労を経て残し伝えてきた。その重さに深い敬意を払いたい。今なお時代は引き継がれており、それらを新たに伝えるものとして気が引き締まる時間でもあった。

貴重な経験にご支援を頂いた教授の先生方、大館市教委、城西小学校の先生方に深く感謝するとともに、今後の教育活動に必ず生かしていきたいと思った。

○「大館市」「北秋田市」の教育や文化に触れることができる２日間の研修であった。その中でもそれぞれ専門的な分野の方々からお話しを伺うことで、普段単独で訪問するだけでは分からない「価値」を感じたり、理解したりすることができた。

高橋教育長から「時選天命」という話しがあったが、我々教職大学院生がそこで感じたことを教育現場でどのように還元していくか。それぞれが置かれた立場で考えながら成していきたいと思う。

○自治体と学校が一体となって質の高い教育を追い求めている姿について、実際に見聞することができた。義務教育と高校教育はまだまだ分離されたものという意識もあるように感じており、地域の中で「タテ」のつながり、系統性を意識して子どもを育てていく姿勢・視点は今後ますます重要となってくるものと考える。今後予定されている能代市教育委員会への訪問に向け、今まで以上に課題感を強く持つ契機となった。

○これまで大館市の小学校の授業を参観したことがなかったが、今回の研修旅行で城西小学校の授業参観と教育長による講話が心に残っている。未来大館市民の育成する「おおだてがた学力」というグランドデザインの基、すべての小・中学校がふるさとキャリア教育を学校経営の柱に据えて学校独自の特色ある教育活動の展開につながっているのだと感じた。学校・地域・行政が一体となった取り組みは、学校マネジメントに欠かせない視点となる部分が多く、貴重な学びの機会となった。

○大館市内の小・中学校は、コミュニティースクールの運営がより現実的で、効果的に行われていると感じた。地域にある学校の現実を本気で考えていることが伝わる。クラブ活動等では教員の負担を減らして、より楽しい活動が行われている点は参考になった。地域との連携のために会議等もあって大変そうに見えるが、つながることで学校が助けられることが多くなり最終的には学校の大きな力となることを見通すことができたように思う。大館市の教育から学ぶことが多かった。今後の現場において今回の研修で学んだことを積極的に取り入れて元気のある学校づくりに励みたいと思う。

○フィールドを広げ、実地研修ができたことで学びが深まった。大館・北秋田市は私の生まれ育った地であり、そこでの教育が堅実に行われていることに誇りをもった。

採掘鉱山業・林業の衰退により、見通しの暗くなりがちな当地区を、「教育の力」で再興しようとする多くの方々の気概に感激した。私もその一員となれるよう精進したい。

○今回の実地研究のキーワードは「未来」である。大館市の教育長は、100 年後の未来に生きる子どもたちのための教育ということを強調されていた。ふるさとのよさを実感させ、ふるさとを思う心情を数世代にわたって育もうという信念が伝わった。花岡フィールドワークは、過去の遺産を未来へ継承しようという「まもる会」の強い意志を感じた。伊勢堂岱遺跡は、世界文化遺産への登録やジュニアボランティアの取り組みなどを通して、確実に未来に継承されていくことだろう。過去と現在と未来を行き来しながら、大館北秋のよさを感じることができた。

〇二日間の研修旅行を通じて、地元秋田には世界的な意味を持つ文化資源が数多くあることを再認識することができた。とりわけ地歴科教員である自分は、そのことを子どもたちに伝え、郷土への誇りと関心・愛着を育んでいかなければならない。また、実地研究を通じて大学院での講義や実習だけでは得られない貴重な経験を積むことができたほか、夕食会等を通じて教員・現職員生・ストマス間の信頼関係もますます厚くなったと感じている。この経験を糧として、後期の大学院生活も頑張っていきたい。